

## 幼児教育学科における初年次演習の取り組み

真下 知子、張 貞京、千古 利恵子、本山 益子

幼児教育学科では、今年度より学科の専任教員を中心に初年次演習（基礎）の内容、方法を一新した。本授業では、広い視野をもち、豊かな発想ができる「考える力」の育成に主眼を置いた。また、学生自身が実習や保育現場で必要な情報活用能力やコミュニケーション能力を意識し、学習動機を高められるよう、保育現場での具体的な事例を用いて授業を展開している。本稿では授業内容・方法を紹介し、今後の展望を述べる。

キーワード：初年次教育、スタディ・スキル、保育者養成

### 1. はじめに

高等教育のユニバーサル化の進行にともない、初年次教育は、学生が大学教育に適應できるようにするための支援として不可欠となっている。2008年3月に出された中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（審議のまとめ）では、初年次教育を「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として<sup>1)</sup>、改めて学士課程教育における初年次教育の重要性が示された。2007年度に国立教育政策研究所が行った「大学における初年次教育に関する調査」では、初年次教育の普及率は既に97%であり<sup>2)</sup>、<sup>3)</sup>、初年次教育学会を始めとする学会や研究会等で、全国の大学での様々な実践が報告されている。しかし、各大学、学部のディプロマ・ポリシー、すなわちどのような人材を育成したいかによって、初年次教育で獲得が期待される知識・技能、態度等も異なるため、それぞれに応じた独自のプログラムが必要とされる。

初年次教育の領域は、スタディ・スキル（レ

ポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等）、オリエンテーションやガイダンス（フレッシュマンセミナー、履修案内等）、専門教育への導入（専門の基礎演習等）、キャリアデザインなどがある<sup>4)</sup>。

本学では、幼児教育学科、食物栄養学科、ライフデザイン学科とそれぞれ出口の異なる学科が設置されており、オリエンテーションや専門教育への導入については、学科独自で行われているものもある。しかし、スタディ・スキルの習得を目的とする初年次演習（科目の設置方法により、初年次演習、基礎演習等、学科によって科目名は若干異なる）は、「短大での勉学に必要なとされる基礎的な能力（読む・書く・聞く・話す・考えをまとめる）を養うこと」をねらいとして、平成23年度より、3学科共通シラバスで、文章表現を専門とする講師による授業が行われてきた。幼児教育学科においては、カリキュラム上、専門との接続を支援する科目が設置されていないことから、本科目にその機能をもたせることが必要であると考えられた。そこで、今年度より、同学科に所属する専任教員4名と非常勤講師1名による学科独自の初年次演習を計

画、実践することとなった。本稿ではこの実践を報告し、今後の展望を述べる。

## 2. 初年次演習（基礎）の内容

### (1) 初年次演習（基礎）の目的

初年次演習（基礎）のねらいは、高校から短大への転換を促すことと、短大での学習に必要な基礎的なスタディ・スキルの習得である。先人によって蓄積された知識や技術を学び、正答を導き出すことに重きがおかれていた高等学校では、学習が受動的になっている場合が多い。初年次演習では、学生自身が自分の専門分野や就職後に必要となる力とは何かを考え、一人ひとりが主体的に学ぶ姿勢を身に付けることと、そのために必要となる学習のスキル（考える・読む・書く・聞く・話す）の習得をめざしている。

### (2) 授業の位置づけ・内容

「初年次演習（基礎）」は、幼児教育学科のカリキュラム上、総合教養科目に位置づけられ、卒業の要件となっている。授業内容を表1に示す。

表1 授業内容

回	内容	形態
1	短期大学での学び(高校からの転換)	講義
2	聴く・話す 3コマを使って自己紹介	演習
3	聴き取り課題の目的と方法 ブレインストーミングとは	講義 演習
4	ブレインストーミングの実習	演習
5	聴く・まとめる 実習オリエンテーションを想定したメモの作成	演習
6	書く 小レポートの相互評価	演習
7	調べる 図書館での情報検索実習	演習
8	書く 主張と根拠 引用の方法 事実と意見の区別	講義
9	聴く・まとめる 保護者からの相談を想定した報告書作成	演習
10	テーマの検討 提示資料の作成	講義 演習
11	発表する 提示資料とスピーチ原稿の作成	演習
12	発表と相互評価(前半)	演習
13	発表と相互評価(後半)	演習
14	発表の振り返り	講義
15	授業のまとめ 学期末試験	講義 試験

※3、4、6、8、10、11回は、授業の始めに聴き取り課題を実施した。

### (3) 授業の方法

①受講者：幼児教育学科1年生

②開講時期・クラス：

1年生前期、週1コマ(90分)×15回

1クラス44名～46名で6クラス開講

③授業形態：演習

④テキスト：『新編「私的には・・・」からの脱出』京都書房<sup>5)</sup>

## 3. 初年次演習の方法と特色

本授業では、これまでの「文章表現」学習を中心とした国語教育的な内容から、広い視野をもち、豊かな発想ができる「考える力」の育成に主眼を置いた。また、学生自身が実習や現場で必要とされる情報活用能力やコミュニケーション能力について意識し、学習動機を高められるよう、具体的な事例を用いて授業を展開している。また、「考える」「聴く」「話す」「書く」力がいくつかの課題を通して運動して鍛えられるよう工夫した。さらに、他者との相互作用を通して多角的なものの見方に気づき、思考を深められるよう5～6名を1グループとしたアクティブラーニング形式を多く取り入れた。アクティブラーニングは、全国各地の大学でその導入が進んでおり、学修成果に良い影響を与えることが示されている。そして、初年次教育でこの形態に対応できる態度を獲得させることの重要性が指摘されていることから<sup>6)</sup>、本科目においても積極的に取り組むこととした。次に、今年度の特徴的な授業内容について述べる。

### (1) 発想法ーブレイン・ストーミングー (第3回、第4回)

保育者には、保育実践や行事を行うにあたり、様々な方向から物事を考え、アイデアを出す力や、子どもの興味・関心を高める工夫をする力

が求められる。そこで考え方を柔軟にし、発想を促す演習を実施した。発想法には様々なものが考案されているが、入学後間もない学生たちが、他者から批判されることなく、アイデアを出すことを楽しめるブレイン・ストーミング<sup>7)</sup>を取り入れた。学生が「春」というテーマで行った実践を資料1に示す。

## (2) メモの作成 (第5回)

実習の場で必要となる情報収集、整理力を鍛えるトレーニングとして、実習先のオリエンテーション参加を想定したメモ作成の演習を行った。はじめに、施設の実習指導担当者の協力を得て教員が作成した「実習の心得」を口頭で読み上げ (A4用紙1枚、読み上げの所要時間7～8分)、学生が個々にメモをとった。その後、グループワークで、お互いに内容を共有し、模造紙にまとめた。その後、教員がテキストを使用してメモの作成方法に関する講義を行った。作成した模造紙の例を資料2に示す。

## (3) レポート作成 (第6回)

保育現場で実際に問題となっている内容を題材としたレポート作成と相互評価の演習を実施した。テーマは「早期教育(習い事)の是非」である。第5回の授業でテーマと参考資料(ベネッセ教育総合研修所、第3回子育て生活基本調査、幼児版より習い事をしている割合、個数、内容等について)を与え、第6回に学生が作成してきたレポートの相互評価を実施した。相互評価の方法は、グループでお互いのレポートを読み合い、内容と形式についてコメントするものである。演習終了後、学生はお互いにコメントを交換し、それをもとに改善したレポートを第7回の授業で提出した。

## (4) 報告書の作成 (第9回)

保育者として保護者から相談を受けたという想定で、その内容を上司に報告する報告書作成の演習を実施した。

相談内容は第二筆者で「障害児保育」を担当する教員が作成した。相談事例の前提として提示したスライドを図3に示す。

相談事例の前提	
■	あなたは 4歳児(年中児)クラスの担任
■	相談時期:5月初め
■	相談に来たのは Aちゃんの母親
■	相談に登場する子どもは
	Aちゃん、Bくん、Cくん、D子ちゃん、E奈ちゃん
	→ いつも一緒に遊んでいる子どもたち
■	Fくんについて
	→ 昨年の秋に入園してきた子ども
	大人しく一人遊びが多かった
	最近になって変化した
	⇒担任として、Fくんの変化に困っている

図3 相談事例の前提

スライド(図3)を提示した後、各教員が保護者(Aちゃんの母親)に成りきって相談内容(A4用紙1枚、伝達の所要時間7～8分)を伝え、学生はメモをとった。その後、次の二つの課題が出された。

- ①保護者からの相談内容を園長に伝える報告書の作成(書式自由)
- ②相談内容と関連して調べる必要があることは何か(Aちゃんの母親が求めた答えとは?)を考え、対応と説明の仕方について調べる(配付した様式に記入)
  - ①については、第10回の授業で報告書作成に必要な項目に関するスライド(図4)と作成例が提示され講義が行われた。
  - ②については、「障害児保育」(全1年生が前期に受講)の授業時に担当教員がフィードバックを行った。

<p><b>報告書に必要な項目</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 報告者名</li> <li>■ 報告日(作成日または報告日)</li> <li>■ 報告のタイトル(報告の概要が分かるもの)</li> <li>■ 相談者または対象者 (何に関する事か、誰からか、などが分かるもの)</li> <li>■ 内容</li> <li>■ 検討事項(例:回答を求められているもの)</li> </ul> <p>※もしも、Fくんについて一度も報告をしたことがない場合は、Fくんの現状を別項目でまとめると良い</p>
--

図4 報告書に必要な項目を示すスライド

(5) プレゼンテーション (第10～14回)

学生が個人の興味・関心に合わせて「子ども」に関連するテーマを自由に設定し、テーマの意味、現状、自分の意見を盛り込んだ5分間のプレゼンテーションを計画、実施した。発表はクラス単位で行い、グループ内で分担して相互評価を行った。それぞれ、A:よくできている、B:ふつう、C:あともう一步の3段階で評価したうえで、「良かった点」「改善を要する点」について自由にコメントを記述した。評価項目を表2に示す。なお、相互評価はお互いに改善すべき点に気づき、向上することを目的としているため、建設的なコメントを記述するよう強調した。プレゼンテーション終了後、学生は評価シートを交換し、それを参考とした振り返りレポートを

表2 プレゼンテーションの評価項目

<b>A. 発表の方法(聞き手を意識した情報伝達)</b>
1. 発表の態度(姿勢・アイコンタクトなど)
2. 話し方(声の大きさ・強弱・スピード)
3. 間の取り方
4. 資料の見やすさ(文字、表、図等)
5. 時間配分
<b>B. 発表の内容(テーマ、仮説、構成)</b>
1. 興味を引くテーマ設定
2. オリジナリティ
3. 全体のストーリー、流れ
4. ポイントや結論の明確さ
5. データや引用が適切(量・正確性等)

作成した。

(6) 聴き取り課題 (全6回)

聴いた内容を正しく文字で表記できる力を継続的に訓練するため、幼児教育や最近話題となっている事柄を取り上げた新聞記事を教員が読み上げ、学生が記述する聞き取り課題を実施した。題材を以下に示す。

- ①ヘイトスピーチ (政府広報 法務省)
- ②小中学校給食(編集手帳 読売新聞 2014.5.22 朝刊)
- ③食の無形文化遺産 (読売新聞 2014.8.22 朝刊)
- ④こどもの声 (編集手帳 読売新聞 2015.2.14 朝刊)
- ⑤ロシアの隕石 (記者のひとこと 読売新聞 2015.2.28 朝刊)
- ⑥ミドリムシ (南方熊楠賞 藻類の研究 朝日新聞 2015.8.28 朝刊)

4. まとめと今後の課題

今年度より学科の専任教員を中心に計画、実践した初年次演習(基礎)の内容、方法について報告した。シラバス作成時点で、幼児教育学科の学生が獲得すべき力、体験すべき事柄に関する議論を行ってはいしたが、学生を目の前に授業を実践しながら、担当者間で打合せや反省会を重ねる中で、それがより具現化されていったと実感している。

次年度以降は、授業実践と学生の学修成果との関連について、実証的に検討することが必要である。学修成果の評価には、直接評価と間接評価があるとされている。直接評価とは、学生が「何ができるか」に着目した評価の方法であり、間接評価とは、学生が「何ができると思っているのか」を学生の自己報告によって調査す

る方法<sup>8)</sup>である。本科目においてもこの両面から学修成果を評価し、授業改善を進めていく必要がある。特に前者については、レポートやプレゼンテーション等、パフォーマンスの評価が重要であるため、学生自身が学習のねらいを理解するためにも、教員が授業改善を行うためにもルーブリックの開発と活用が望まれる。

また、幼児教育学科の全教員が育てたい「保育者像」を具体的に描き、そのために必要な力を共有することが必要である。そして、すべての専任教員が「初年次演習」の内容に興味をもち、授業実践に関わることが望ましい。さらに、入学前教育、オリエンテーション、アドバイザー制度、ラーニングコミュニティとしての保育ゼミの活用等、保育者となるために大学で学ぶための基礎的な力の育成を総合的に考え「初年次教育」を実施していくことが期待される。

## 謝辞

非常勤講師として本科目をご担当いただき、授業内容、方法の検討および学生の指導にご尽力いただきました梶丸岳先生に記して謝意を述べる。

## 引用文献

- 1) 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会、学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）、2008
- 2) 国立教育政策研究所、大学における初年次教育に関する調査、2009
- 3) 山田礼子、初年次教育の組織的展開、初年次教育学会誌、1 (1)、p.66、2008
- 4) 川島啓二、初年次教育の諸領域とその広がり、初年次教育学会誌、1 (1)、p.27、2008
- 5) 千古利恵子、張貞京他、『新編「私的には・・・」からの脱出』、2013、京都書房
- 6) 畑野快他、アクティブラーニングの経験は学修成果と関連するのか、大学教育学会誌、37 (1)、p.92、2015
- 7) ブレーン・ストーミングは1941年、アメリカの創造性開発の研究者 A. F. オズボーンによって提唱された集団的思考法である。①自由奔放に意見を出す、②質より量を大切にする、③人のアイデアの追加・改善を歓迎する、④人のアイデアの批判・評価をしてはいけない の4原則のもと行われる。A. F. オズボーン、上野一郎訳、独創力を伸ばせ、1958、ダイヤモンド社
- 8) 畑野快他、前掲書、p.87

## 参考文献

- 中村博幸、日本における初年次教育の実践事例、第9章 京都文教大学、濱名篤、川嶋太津夫編著、『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』、2009、pp.119-133、丸善株式会社

